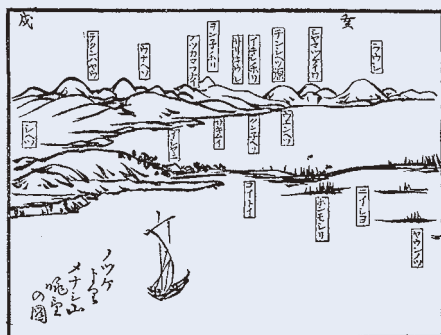
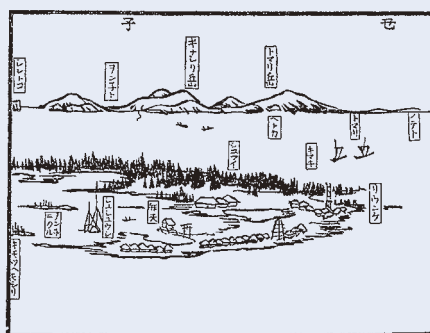


江戸時代には歓楽街も!?

国後島にもっとも近い要衝として1799（寛政11）年には幕府によって野付に通行屋が設けられた。19世紀初めには有数の鯨漁場として根室場所の番屋からの出稼ぎの人で賑わったという。『東蝦夷日誌』に掲げられている松浦武四郎の絵図には、シュシュウシ、リウンケ、キマキ、シュフイなどの地名が書き込まれ、弁天社殿を含めてかなりの家々の立ち並ぶ光景が描かれている。ここにはキラク（喜楽か?）と呼ばれる歓楽街もあった、という話も伝えられる。通行屋の土塁、賑わった頃の畑の跡などが残っている。この野付場所の経営に力を注いだ秋田出身の加賀家文書が別海町郷土資料館附属の加賀家文書館に収められている。

野付半島の付け根の部分は標津町だが、それから先の部分は別海町に属する。ネイチャーセンターには半島と尾岱沼の自然や歴史が展示・紹介されている。トドワ

まで夏季には馬車が動いている。また、トドワラから尾岱沼港まで、砂嘴の最先端（野付岬）のアラハマワンドと尾岱沼港までを遊覧船で往復することもできる。



松浦武四郎『東蝦夷日誌』



夕陽に輝くトドワラの風景



野付半島全景



●お問い合わせ先
 別海町商工観光課 Tel. 01537-5-2111
 別海町観光協会 Tel. 01537-5-2111
 別海町郷土資料館 Tel. 01537-5-0802
 野付半島ネイチャーセンター
 Tel. 01538-2-1270

一番突き出したところに野付岬灯台がある。その目の前に国後島が横たわる。北方領土にもっとも近いところである。

打瀬舟は、小型底引き網漁法という漁のやり方で、先にも述べたように、浅くて、しかも海草が多くてスクリュウが使えない海での漁法である。名産のホッカイシマエビは、ここではアマモという海藻の中にいるから、この漁法がもっとも有効なのだ。アマモは海藻ではなくて海中に生えているが顕花植物である。和名はリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結いの切り外し）と言って、植物の名前としてはもっとも長い。

漁は毎年、春は6〜7月、秋は10〜11月の短い期間のみ行われる。湾に浮かぶ白い三角形の帆が霞にかすんでゆらめく姿は、野付湾の風物詩としても知られている。